

安曇野市観光振興ビジョン委員会
第4回委員会議事概要

- | | |
|----------------|--|
| 1 委員会名 | 第4回 安曇野市観光振興ビジョン策定検討委員会 |
| 2 日時 | 平成24年8月22日 午後 1時から午後 3時 50分まで |
| 3 会場 | 穂高総合支所 大会議室 |
| 4 出席者 | 増田委員、川崎委員、樫井委員、清水委員、松本委員、太田委員、加渡委員
上條委員、等々力委員、宮崎委員、中村委員、浅川委員、岡本委員 |
| 5 市側出席者 | 曾根原観光課長、赤羽課長補佐、高山係長、請地係長、渡辺係長、山本主査、
受託事業者（交通公社） |
| 6 公開・非公開の別 | 公開 |
| 7 傍聴人 1人、記者 0人 | |
| 8 会議概要作成年月日 | 平成 24 年 8 月 23 日 |

- 会議事項
- 1 開会
 - 2 委員長挨拶
 - 3 議事
 - ① 安曇野観光の理念/目標像（案）について
 - ② 基本戦略と主要施策（案）について
 - 4 その他
 - 5 閉会

議事録（概要版）

① 安曇野観光の理念/目標像（案）について

委員

- ・ 「観光産業」というグループについて、産業遺産や工業見学ということを考えると「産業」にしても良いのではないか。
- ・ 「歴史・文化、芸術」グループに教育というカテゴリーが入っているが、「生活」のグループではないか。

委員

- ・ 「生活」のグループは、もっと整理した方が良い。「生活」のなかで交流というカテゴリーがどのようにつながっていくのか整理すると良いのではないか。

委員長

- ・ 頂いた意見について、持ち帰って検討する。

② 基本戦略と主要施策（案）について

委員

- ・ 「基本戦略5うるおう」には、デジタル化への対応を重点的に取り組むことが必要ではないか。

- ・ 「基本戦略 2 つくる」について、安曇野は食の魅力に欠けているため、目玉として新たな「食」の魅力をつくる必要があるのではないか。

委員

- ・ 夏休みで福島から親子 20 名を受け入れた。事前に安曇野で何をしたいのかアンケートをした結果、川遊びや安全安心な野菜を食べたいというリクエストが挙がった。特別なことをしなくても喜んでくれ、一緒に暮らした感じだった。

委員

- ・ それぞれ既に各分野の施策で取り組んでいることもあるため、本計画で進めるべきことは地域の光を来訪者に知ってもらうために、どのような取り組みが必要かということではないか。

委員長

- ・ 既存計画での取り組みを交流という観点のなかで光らせていくことが、観光の役割だろう。

委員

- ・ 9月に三郷で、若手のリンゴ農家と来訪者との山コンを開催する。参加者は、地元の農家が普段から整備している里山に行き、ただ登山するだけでなく一緒に登山整備を行うもので、この会議を基に思いついた企画である。

委員

- ・ 理念が先行しすぎて具体的に何をやるのかが見えない。どこでもやっている取り組みとなっており、安曇野の何に光を当てるのかが見えない。現状の安曇野観光に関する数字を見ながら、今後安曇野市としてどのような数字を目指していくべきか議論すべきではないか。観光ビジョンの本質は何なのか議論したい。

委員

- ・ 基本戦略を 5 つに分けるのは良いが、ソフト・ハードは整理した方が良いのではないか。「安曇野暮らし」はソフトをいかに充実させていくかということではないか。光っている小さなものを見つけ、つなげてストーリーをつくり伝えていくという考え方が安曇野に合うのではないか。
- ・ 移住交流をもう少し強く打ち出すべきではないか。
- ・ 「基本戦略 2 つくる」は言葉として強く感じるため「育む」が良いのではないか。

委員

- ・ 駅のスタンドに観光パンフレットを置いている。目的地に到着してからの情報収集として、デジタルだけでなくマップも重要である。
- ・ 市内には「真々部」の歴史を伝えるなど小さな活動をしている人達がたくさんいるが、そのような活動を把握しきれていない。そのような市民の活動を支援していくことが安曇野の歴史、文化の継承になるのではないか。

委員

- ・ 「安曇野暮らし」はどのような暮らしなのか、もう少し明確にするべきではないか。
- ・ 観光産業は交流のゲートウェイとして機能し、全体を括るものであり、枝葉の 1 つではない。
- ・ 「安曇野暮らし」というコンセプトは内向きであり、外に向かっていない。広報戦略が必要ではないか。総合計画の「北アルプスに生まれ ころろ輝く 田園都市 安曇野」という将来像は安曇野らしさを出しているのではないか。

委員

- ・ 理念は立ち戻るところとして、議論する必要があるだろう。自然との共生が安曇野暮らしではないか。それをどう発信して移住、来訪者を呼ぶかを考える必要がある。
- ・ 「基本戦略1まもる」では、安曇野市が環境で何をしているのか、対外的にアピールしていくが必要である。例えば、自然エネルギーをどのように使っているのか、ということ議論したり発信したりすることで安曇野は自然環境と共生している地域であることを定着させていく。里山の自然を育てることが必要ではないか。
- ・ 「基本戦略2つくる」について、新たな食は簡単には作りだせない。全国で戦えるのはリンゴ、そばだろう。それぞれの魅力を高めていくことが必要であり、具体的には、そば街道を設定するなどの取り組みを推進していくことが考えられる。
- ・ 「基本戦略3つたえる」では安曇野という名を売っていくことが必要である。例えば、安曇族を使って九州や朝鮮半島とのつながりをつくっていくなど具体的に展開していったほしい。安曇野アートラインでは、全館共通パスをつくる必要があると考える。これは各館の努力では難しいため、市がやるべきである。
- ・ もう少し具体的に何を進めていくのか話し合いたい。

委員

- ・ 「基本戦略5うるおう」では、都会でしっかり情報発信をすることが必要だろう。
- ・ 基本戦略1~5それぞれの連携が大切である。

委員

- ・ 来訪者に安曇野を理解してもらい、本当に満足してもらえているのだろうかということ課題に感じている。

委員

- ・ 理念は計画の魂として築くことができた。次は何を重点的にやっていくのか考えていくべき。
- ・ 安曇野は恵まれているが、何でもあることは何にもないことに等しい。わさび、りんご、米など全国的に知名度が高いもの一点に絞って打ち出していくべき。「水」というテーマでも全国に売っていけるだろう。
- ・ 「食」は来訪の目的の大事な1つ。安曇野の野菜、果物などで安曇野らしさを出すこと、ストーリーでつないでいくことが必要ではないか。
- ・ 基本戦略1~5は独立しているわけではなく、つながっている。また、観光という言葉を使いたくないという意見もあるが、観光は観光として認めるべきではないか。

委員

- ・ 安曇野の人は地元が好きだが、安曇野は全国的にはまだまだ知られてない。リピーターの理由は、景観などではなく、人とのつながりでリピートしている。しかし、現状では、お客様が求めているものと提供しているものに差があると感じる。

委員

- ・ 安曇野スタイルは、暮らしていくなかで感じている安曇野の良さが、観光客に伝わっていないのではないかという問題意識でスタートした。これからは、1泊から2泊・3泊へといかに長期で滞在してもらえるかという取り組みが必要である。
- ・ 「水」「アート」は安曇野のキーワードではないか。

委員長

- ・ プロモーションや旅行会社に頼っている地域ではなく、自分たちの身の回りをきちんと固めている地域でないと、しっかりとお客様を確保できていない。安曇野でも安曇野暮らしを体感できるように身の回りを固めていくことが必要である。
- ・ そのうえで、どうやって来てもらうのか、泊まってもらうのか、連泊してもらうのか、単価をあげるか具体的に考えていく。基本戦略1～5は、全てつながることで生きてくる。観光産業は基本戦略1～4を下支えするものであり、宿泊産業が生き残っていくために必要なものである。

委員

- ・ 仲間づくりをすることで、地域内の連携が進み、来訪者にも喜んでもらえる取り組みになっている。

委員

- ・ 安曇野には、たくさんの素材があるが、それらをつなぐストーリーを提示することが必要である。
- ・ 「基本戦略5 うるおう」の観光情報発信強化が一番大事である。穂高駅前の案内所だけでなく、地域内の交通拠点となる施設にサテライトの案内所が必要ではないか。そして、それらをつなぐ域内交通も必要である。

委員

- ・ 安曇野にある魅力をつなげていくことが重要である。観光事業者として、美術館の「パス」をつくることができないか動いたこともあったが、実現は難しかった。
- ・ 自家用車で来るお客様が多いが、年齢の高い方は公共交通機関が多い。域内交通がないことが一番の問題である。

委員

- ・ 域内交通の問題は大きく、来訪者は市内での交通費の負担を減らしたいと考えている。
- ・ 由布院と安曇野は何が大きく違うのか。

委員長

- ・ 由布院では、みんな仲が良く毎週集まって、議論している。高級旅館の料理長や国民宿舎が一緒になって勉強会をしている。また、誰が来ても地域の仲間みんなに紹介している。

委員

- ・ 規模が小さいところはやりやすいが、安曇野市は大きい。
- ・ 今後は、何をポイントにしていくのか、将来の事・来年度の事を考えて、両方の議論を進めていくべき。

委員

- ・ 自分で提案したものは自分ですべきではないか。自分でやってみた結果を持ち寄って地域で議論していったらどうか。

委員

- ・ 「水」ひとつとっても、市内で安曇野産ではない水を買っていたり、汚れている水でも澄むことができる濃い親水公園で泳いでいたり理想と現実のギャップは大きい。イメージの落差を埋める努力をしていくべき。

委員

- ・ 「水」で宿場が発展したのに、せせらぎに蓋をしている。観光協会の横に「足水」をつくるなど、水に親しむポイントが必要ではないか。

委員（岡本）

- ・ 域内交通については、道路整備が必要だろう。「小布施見にマラソン」のように、暮らしている人も巻き込んで安曇野らしいことをやりたい。

委員

- ・ イルミネーションの時期には、豊科駅から国営アルプスあづみの公園までシャトルバスがでており、近隣の高校生や車のない人たちの利用が多い。域内交通の充実が望まれる。

委員

- ・ 安曇野に移住する前は目に見える景観などを評価していたが、移住してみて目に見えない歴史、文化などの資源が非常に良いと感じている。そのような目に見えないものは、どんな天候でも来訪者に満足してもらえるものになるのではないか。

委員長

- ・ 次回は、数値目標をどうするのか、優先的に取り組むべきプロジェクト、長期的に取り組むプロジェクトについて議論したい。

委員

- ・ 人と人の結びつきと我々自身が楽しく過ごすことが第一歩である。

以上